

20世紀理論言語学の展開

1976-1-20
橋爪大三郎

(MS)

(Overview)

はじめに、本稿の性格をのべておきたい。社会学における私の理論作業の目標は、概説されたことのないひとつの一般理論を構成することにある。この理論は、(勿論、最も成功した場合にすぎず、多くの労力を空費したあげておろす) 2つの輪郭を示すにとどまるにすぎないのかもしれない。少くとも、構造機能分析(以下、SFAと略記)、既成(Marxism)を完全に揚棄するものではないからである。多くの理由があるが、既存の社会理論の多くが、社会現象と、言語現象との同相性を放棄しない、とゆえである。まわめて粗雑であり、精度の低い論理をしかるべきでないように思われる。ゆえに、重要な批判的検討の必要がある。私は Marx の新説、その後の批判理論、吉本・三浦理論、構造主義、宗教学 などの示唆を之と、言語現象の本質を説明することで、人間、および社会を理解する上で決定的な重要性をもつている。これを察する、という仮説をたてたに至った。従って、私の作業に即して言うべし、本稿は、近代言語学の核心を理解しようとするための 里程標としての意味をもつている。

本稿と、1月20日の私のレポートとの関係を、次にのべておきたい。私のレポートは、SFA ないし機能理論に対する、正面からではなく、側面からある批判(あるいは、あげつらひ)である。その主旨は、社会学的な機能理論を、相対化する、こと、に過ぎない。このために、理論言語学と理論社会学とに共通するテーマ——両者ともに、社会科学であるゆえに、多くのテーマが共通しているのは当然である——をいくつかあつめて、報告する予定である。ゆえに、たと

は、システムにおける〈時間〉の概念、理論の妥当性基準、意味連関と記号実践、といった問題である。昨年12月2日の日付で用意したレポートは、今回のレポートには用いないが、そこでは、言語学を内面的に諒解し、紹介する作業と、言語学/社会学の比較方法論にもあたる作業とが、未分化のまま混淆していた。そこで今回は、前者を本稿としてまとめ、あらかじめ配布し、後者を、前者を前提として、20日のレポートの内容とした(別にレポートを用意する)。本稿は、したがって、レポートのそのものであるが、その基礎資料である。殊なことに、社会学を学ぶべきは、またまた、言語学は「遠い」隣接科学であり、私を含めてその内容にあまりにもなじみがない(即ち、無知な)ので、活潑な議論を保證するものとして本稿をまとめることが、無駄ではないと信ずる。

目次

頁	目次	頁
3		
1	近代言語学の成立と展開	2
2	ソシュールの一般言語学	10
3	ブルームフィールド：行動主義モデルの墜落	23
4	チャムスキー革命：〈生成〉の理論	31
	文献	46

1. 近代言語学の成立と展開

前・近代言語学 人間と言語とが、如何なる関係にあるか、という事実は、日常的には自明のこととみなされておる。11つの時代、あらゆる社会で知られていたと云うべきである。しかしながら、このあまりにも自明な事象を方法的に疑うことから、組織的・系統的な言語の考察が出現する。そのような言語の「科学的」研究は、文明とともに、知られる限り古く

から始まった、と推測される。ハロドスの報告(紀元前9世紀)によれば、あるエジプトの王は、人類最初の民族を授けたところの故郷で、2人の新生児を稱賛し、はじめに嘆息することを書き記した、という。古代ギリシャの思想家たちの間でも、言語に関する考察はきわめて重要な課題のひとつであった。プラトン、単語の起源を論じ、事物と、その名称であることとの関係が、自然で必然的な関係であるのか、それとも、単なる人間の慣習の結果にすぎないのか、を問題とした。この議論から、その前半の立場に立つ類推論者 Analogists, 後半の立場に立つ変則論者 Anomalists が出て、論争を繰り返した。類推論者の立場からは、言語研究が語源学 Etymology の形であらう。また、トラックス、テュスコラスらは、ギリシャ語文法についての記述を行なった。ギリシャ古典古代は、言語に関する思想・研究のひとつの中心であり、本質的な問題は「何かと何と」論じられた、と言っても言いがちではない。

それについて中世は、言語思想の上からは、見るべき成果を生んでいない。それは、主として、キリスト教の影響である、と考えてよいであろう。原始キリスト教は、主として信仰の他に、「コトバ」信仰をも吸収する形で自己形成をとげた。それは、とくに、ヨハネによる福音書の冒頭に色濃くあらわれている。ここから、純正なる言語は、神と人間とを媒介するものである、との観念が生じた。このおかげで、言語に関する考察は、何かと、神に関する思索に、その位置を奪われてしまう。したがって、中世的なスコラ神学の秩序のもとでは、言語現象自体に対するまことな首肯は、行なわれにくいのである。学問の仕事は、奥孔言語である古典ラテン語の研究に、集中した。

ルネサンスといふ大きな潮流は、当然、言語研究の分野にも大きなインパクトを与えかねない。それは、大きくわけて、ふたつの形をと

った。ひとつは、非西欧世界の諸言語を知り、その研究が求められたことである。11世紀には、国語言語が成立したことがある。

十字軍遠征は、イスラム世界についての豊富な知識をもたらし、閉鎖的なヨーロッパの世界に衝撃を与えたが、新大陸の発見と、それについて大航海時代は、言語に関するヨーロッパ人の知識をいちどきに豊かにする結果をもたした。その中心的な担い手は、宣教師たちであった。宗教改革に反対する、カトリック各教団の宣教師たちは、全世界の植民地、交易地にはいりこみ、布教の目的をほりめぐらした。彼らのまっさきにとりかかる仕事は、教会を建て、現地の人々の話す言葉をローマ字に定着し、辞典をつくり、聖書を現地語訳し、現地に印刷・出版することであった。彼らは、言語研究の素人ではあったけれども、このおける技術・知識の膨大な蓄積が、実証的な基礎に立つる言語理論をのちに開花させるためにあつた、と云えるだろう。

ラテン語は、ローマ帝国が解体したのちも、知識階級の書記言語として命脈を保ちつづけた。それに対して、日用語としての民衆ラテン語は、ロマンス諸語へと分裂してゆく。そして、近世初頭にいたり、ひとつの政治-経済圏として、各国民社会が自立するに相前後して、ひとつの国民言語に対して規範的な意味をもつような、文法が出現してゆく。イタリアのダンテ、スペインのセルバンテス、フランスのラフシー、イギリスのマエリステッドは、その代表例であろう。ドイツでは、ルターの聖書訳を忘るべきではない。ルネサンスはヨーロッパの知識階級に、ギリシャ・ローマの古典研究を復興させ、言語に関する関心を再び目覚めさせた。このような態度は、修辭学、文章法とは別に、文法—自国言語の規準となる、という意味での規範文法—を自立させるといふ結果を生む。この種の一般文法書の中で、ルイ・ロワイヤル修道院の『一般論理的文法』(1660)が最も有名であった。

18世紀末には、互いに親子関係のたぐい、あるいは無関係の、多くの言語に関する詳しい知識が、ヨーロッパの研究員のもとに集められていった。しかしながら、この時代の人々は、決して、体系的に整理された関心をもって、これらの言語に臨んでいたわけではない。彼らは、実際のことば「行為」と書記とを区別せず、書記の字母(アルファベット)と音とを区別せず、その他重要ないくつかの概念上の区別を行なわなかった。ゆえに「科学的」と呼ぶに値する言語研究の出現は、19世紀をまたなければならないのである。

だが、18世紀末に、フランス以来途絶えていた、言語一般の存在根拠を問うという理性主義的・人間的な関心が復活してきた、という点には、ゆえに注目に値する。フォウスキーは、これら一連の研究を、デカルト派言語学 *Cartesian Linguistics* と名づけているが、これらの人々の関心の多くは、言語の起源に関する関心、という形であらわれた。言語の起源は、自然音の模倣に発する、とあるワウゴン説、発音器官のメカニズムに由来するといふドンドン説、感動の叫びに由来する、といふホーホー説をはじめ、素朴な各種各様の珍説によって説明された。ヒルゲンヤウワーの『言語起源論』、アンボルトやポイトナーの論考は、今日に至るまで、その独創的な価値を喪つていない。しかしながら、19世紀以降の言語学の発展は、このおと、言語の存在一般をあらゆる理論の延長上に築かぬことはなかったのであり、かえって、具体的な言語資料に立脚した地道な実証的比較研究として出発したのである。

近代言語学 比較言語研究を準備したものと、ゆえに、まず、サンスクリット研究に目をとおすのがおこなわれることになる。

サンスクリット語の発見は、ヨーロッパ知識階級の言語観、文明観に、破壊的な影響を及ぼした。それは、なぜであろう

か？ サンスクリット語——インドの上代言語——の存在そのものは、英国の植民者たちを通じて、すでに16、17世紀ごろから知られていたが、18世紀にはじめて、サンスクリットの書記記録の解説、および、ヒンドゥー文典の研究があらわになり、実に驚くべきことが明らかとなった。パーニニの文法は、簡単にいって「言語の正確な記録」といふ点で、既述のヨーロッパ言語の文法をしのぐ内容を備えていたのである。ヨーロッパの研究員たちは、ギリヤ・ローマ文法に範を定むるのでない、新しい文法構成の未発をそこから学ぶことができた。そして、さらに重要なことは、サンスクリットという、この島を遥隔の地インドの、はるか上代の言語が、ギリヤ、ラテン語などよく知られたヨーロッパ言語と、明らかに対応関係をもつ姉妹言語の関係にあることが明らかとなったのである。この事実が、ヨーロッパ中心の、キリスト教的、言語観の根拠を完全にうちくたした。ウリッペー、ライオン、ラテン、ギリヤ語、サンスクリット語、ゴート語が、今はすでに失われてしまったある共通祖語から分岐したものである、との仮説を1786年に発表するに至る。

このようにして、19世紀言語学の中心テーマは、印欧諸語の歴史的・比較的研究であった。おと、フランス語、ドイツ語、スラヴ語、ゲルマン語、ケルト語、アルプス語、アルパ語、その他の少数言語、古代語が、インド=ヨーロッパ語族と評するべきいくつかの類縁グループをなし、相互に、枝分かれ関係によって結ばれていることが、書記記録その他の言語資料を媒介にして、徐々に実証されていったのである。しかも、言語は時とともに変化するものであることは明瞭となり、同一の言語も、隔たった地域で長期間使用されていこううちに、その言語を親言語とする別々の言語に分裂してしまうものと考えられるようになった。いくつかの言語に共通する特徴は、たまたま、その

親言語の特徴である、と考えらるることになる。体系的な比較は、フランス
 ボーフォヤ、R.K.ラスクの仕事にはひきつらぬ。ヤーコフ グリムは、ゲルマン言語
 と他の印欧言語との間の子音の対応に関する「グリムの法則」を定式化
 した(1822年)。これらについて、多くの学者たちが、多くの言語の多くの文法
 上の特性について、組織的・体系的な比較分析の作業を蓄積してい
 ったのである。このおかげで、実証的、歴史的、「科学的」研究志向が、19
 世紀の時代思潮としての進歩論と無関係であると言えないのは、当
 然である。19世紀後葉には、ライプツヒを中心に、少壮文法学派
 が成立し、レスキ、オストホフ、スリマンらが活躍した。とりわけ、ハルマン
 パウルの『言語学原理』(1880)は、史的言語学の方法に基準を与え
 る書物となり、少壮文法学派の音韻法則には例外なしと言われたもの
 である。ソシュールが、若い時期をこの学派とともに過ごしている点は、注
 目すべきである。

20世紀の言語学は、フェルディナンド ソシュールの出現と共に始
 められた。と言ってもよいであろう。ソシュールの仕事は、単に言語学のある一
 分野が無視されがちな真面目な研究をした、という性質のものではなく、文
 字通り、在来の言語学のパラダイムを一新し、理論言語学を全く新しくし
 礎を築いた、という点にある。これは、まさに、圧倒的な事件であり、
 革命であった。詳しくは、次節で述べることになるが、以下では、ソシュ
 ールの仕事と、他の20世紀言語学派との関連を、展望しておく。

ソシュールは、スイス生まれ、ライプツヒの大学で学ぶうち、少壮文法
 学派の人々と接触をもち、のちに、1人になり、晩年は、ジュネーブに居るが、
 彼は、史的言語学には飽きたらず、理論言語学への関心を次第に強め
 ていく。と、ロシアの学者、クルトネヤ、クルチーフスキーらの音韻論、また、
 ホットーの仕事、ブルハクと社会学などと接触があることから、独自の

な一般言語学の構想を抱くに至ったのである。ソシュール自身は、幾年ぶりに
 (2病に斃れた(1913)が、弟子たちがその講義録を、『一般言語学講義』
 (CLGと略記—以下同様)としてまとめ、出版した。これには、白田の、構
 造的な思考法の精華が、色濃く流れている。

一、ややおく42、ロシアにおいて、フォルマリストたちの言語運動
 が20世紀はじめに昂揚する。その人々のなかには、トルビニコイ、カシ
 フェフスキ、ヤーコフソンらもいたが、彼らは、文芸批評や、言語研究におい
 て、やはりひとりの構造的な視点を、共有の点としていた。

ソシュールの影響は、いくつかの方向に流れていく。まず、オースト
 リアで1926年に結成された、言語学サークルの中に、リーヒトネンと
 と並び、重要な源泉として、扱われていく。マテマウズ、ヤムカシ、フス
 キーが中心メンバーであるが、とくに、革命によってロシアを退けた上記
 3人のフォルマリスト達が、1928年1月において開催された第1回国際
 言語学会において、「構造主義宣言」を発表し、参加してきた。この大
 集団は、アラーグ学派と呼ばれるが、トルビニコイ、ヤーコフソンらに
 よる音韻論の研究は、音素の概念を徹底的に定式化しているなど、自覚
 ましい成果をあげ、注目をあつめた。

オーストリアの学者たち、コロンハーゲン学派に対する影響があが
 られるであろう。その代表者は、フレンドル、イェルクスリウであり、彼らは、ソ
 シュールの一般言語学を膨張し、論理学、哲学への接近を示している。と
 りわけ、イェルクスリウの言語素論(Glossematics)は、社会科学にも
 極めて有益な木口に富み、独創的な理論である。

オーストリア、ソシュールの直接の弟子たち、ミュネーハ学派があ
 げられる。バイエ、セラエ、フリ、は、それぞれ独自の仕事を積みあげ
 た。また、フランスにおけるソシュール系の学者としては、ボンジェ=スト、マ

マルティネラがあり、フーゲ学派に投稿した。フランスは、爾来、いわゆる「構造主義」の中心地であり、ソシュール復興の立役者、ミロト、ボントリ、ウィーランドをはじめ、後多の研究音、理解音にことがかかっている。ソシュール理論の間接的な影響をうけた人々をまてあげるとすれば、恐らく、あの2の人々を挙げなければならないであろう——ただし、アメリカの言語学については、やや事情が異なる。

アメリカの言語学は、ヨーロッパとは独自の発展をとげ、ソシュールの影響から最も遠くにあった。そしてまた、いま、現代言語学における新しいパラダイムの革新——いわゆる、フォウスキー革命——の中心地として、最も重要な位置を占めるに至っている。アメリカの言語学について、一瞥しよう。合衆国では、さびつあるインディアン諸言語を記録する、という実務上の関心から、まじめに実践的・記述的な言語研究が主流を占めた。19世紀におけるその代表者は、ボアズであり、20世紀前半には、ブルームフィールドが出て、アメリカ独自の学派を形成するに至った。これらの人々は「構造言語学」を自称している。この立場は、ワトソン流の行動主義に支離し、まじめに厳密な意味での実証性に根拠をおこうとあるものである。ソシュールの立場は「メンタリスト」として斥けられた結果、ブルームフィールド学派の圧倒的な勢力にすまたがられ、ソシュールのCLGは、1959年に存続を遂げられなくなった。ヤコブソンは、イギリスの人としてニューヨークに渡り、雑誌“Word”において、ヨーロッパの音韻論等の普及に努めたが、フォウスキーの変形文法が出るまで、合衆国は依然として後期ブルームフィールド学派の支配下にあった。

フォウスキーは、この後期ブルームフィールド学派の人、ハリスの門下にある。生成・変形文法を今日知られる以前に創出した。この理論は、その単純さ、応用性の広さにより、またたく間に世界の言語

学界を席捲したのである。フーゲ学派の理論も、また、アメリカ構造言語学も、音韻論に基礎をおきそこから言語体系を構造的に把握しようとする、という方向性では、一致していた、と言えよう。これに対して、フォウスキーの理論は、より上位のレベル、すなわち、統合構造から、下降的に文を生成させる、といふ、新たな文法の理論を確立したのである。この理論は、統合理論の教科書を全て書きかえりほどの影響を、世界に与えた。この学派は、現在も成長を続け、近代言語学の最弱点であった統合理論に満足すべき内容を与えている、と言えよう。

言語学の、もうひとつの重要な領域——意味論——については、事態は、さういふほどあるいは全く進展していない。ゆえにゆえに、オズボーン、フォウスキー（あるいは、ソシュール、あるいは、マルクス）を必要としている。

以上は、あまりにも西欧中心的な、言語研究史の概略であるが、これは以下に述べられる、社会科学との関連を顧慮しながら、理論言語学の重要な論点を、いくつかあげていくことにしよう。

2. ソシュールの一般言語学

ゆえにゆえにがまきみをおくべきは、ソシュールの理論である。ここでは、20世紀の言語学を特徴づける、あの「構造」の概念、そして、応用可能性の無限に豊かな、数多くの理論用具が、見出されるからである。これを、少しでも正確に理解して、とるならば、今日流布している多くの誤解、曲解、俗説から自分を守ることが出来るばかりか、社会学における諸概念の鋭さを格段に増し、探求をふやすことが出来るであろう。多くの科学がそうであるように、理論言語学もまた、ゆえにゆえに言語に関する日常的な

感賞や常識からは程遠い。その点だけには心ではなげなげ。

ソスニールの生涯 ソスニールの生涯を知ること、彼の理論を理解するポイントをゆいゆいに与えるであろう。ソスニールは、1857年の末、ポネーウの旧家に生れ、17才まで同地であつた。ライプツィヒの大学時代、彼は、少壮文法学派の中核となる人々にまじり、言語学を研究する。20才のころで完成した処女論文——「印欧諸語の原初母音体系についての賞書」——の中で、ソスニールは、今は存在しないひとつの母音 *A の存在を予言するなどして、この母音の存在は、ソスニール没後の1920年、クリロヴァツキによって発見された。ソスニールの、このような大胆な知識推論、洞察は、単なる天才の力だけではなく、史的比較言語学の形をかりながら、ひとつの構造的ともよびうる分析法を發揮したことに基礎がつけられていると言えよう。

ソスニールは、ライプツィヒの学風になじめず、もともと1871年ポネーウ大学に移るまで、そこで比較言語学を講じる。1872年には少年から論文を発表し、講義を通じて多くの学生に感銘を与えるが、ポネーウに移って以降は、殆ど論文を発表しなくなる。そのころ、一般言語学という全く新しい枠組みが、ソスニールの中で育ち上った。やがて、学生のたごの願ひで、ソスニールはポネーウ大学において一般言語学の講義をひらく。講義は、1906-1907、1908-1909、1910-1911の3回にわたるが、3回目の講義は、病気のため中断してしまう。ソスニールは、ついに一冊の本も書きあがらず、1913年刊界の人となつた。

『一般言語学講義 (CLG)』 ソスニールの一般言語学講義を受講した学生は、ゆづか数名にすぎなかったが、その内、ハイユ、セシエの両名が、各人のノートをまとめて、1916年、出版した。そして、この書物によって、ソスニールの理論は世の知るところとなつたのである。ソスニールが、一般言語学という名称のもとに、どのような理論を構想していたか、を正確に知ること

は、さまざまの理由からして、きわめて困難なものであるが、ゆづかともいひゆいひ、次のことを確認しておくことは、研さんである。まず、まず、彼の一般言語学は、何時代の主要的な言語研究の方向に向かう。深刻な反省から発してゐることである。歴史的、比較言語研究の方法が、言語現象の科学的理解を与えるに足る方法であるとは到底言えない。とソスニールは言ははじめた。その反省、自己批判、悔恨、挫折感が、晩年のポネーウ時代の彼を苛んだことは明らかである。従つて、次に、ソスニールがいう一般言語学とは、個々の国語研究、歴史的知識、...からなはなれて、あつたどりの言語にも共通して妥当する枠組み、人間存在にとって言語現象がどのようなものであるかを根拠づける理論であるかであった。そして次に、ソスニールは、究極的には、人間の行つた記号的な実践をすべてを扱う包括的な一般理論として、記号学 *semiology* を構想していた。その一部分として、言語学を考へてゐた、ということである。このようにして、ゆいゆいは、ソスニールからはじめた、言語の存立のありかたに対する一貫した考察を目にすることができたのである。

しかしながら、出版された『一般言語学講義』の前途は、決して坦々としたものではなかつた。ゆいゆいは、小林英夫氏の日本語訳を世界に先がけした(1927)ことを、誇りとしたが、ドイツ語訳(1931)、ロシア語訳(1933) ... がこれに及ばぬもの、英語訳が1959年まであつたことがなかつたことを悔やみだした。ソスニールの諸概念は、1930年ごろまでに、フーゲ学派、コロンハーゲン学派に受容され、決定的な影響を与えたといへるものの、ソスニールの思想は、11くたびか「再発見」される必要があつた。それは、レヴィ=ストロース、バンガニスト、キルペロフ、エングラー、デ・マウロらの尽力のおかげである。日本では早くからソスニールに高い評価が与えられてゐたので、この辺の事情は、や、想像

UにUもあがある。

CLG が受容され難かったのは、実は、読者の責任であるとは
必ずしも言えない。CLG には、テキストとしての信頼性に関するところがある。ま
ず、弟子の編者たちが、勝手に改竄を加えている部分がある。それに、必
しもひとつの視点からなされたものではない、前後 6年にわたる 3回の講義の
内容を、一冊にまとめ直してあること。この結果、内容的な整合は、一
層高まる。それに、ソスールが、その潔癖性、完全嗜好のため、毎回の
講義トをその都度破壊してしまっているため、である。したがって、目下
CLG の原資料や遺稿類が刊行中であるという点の、ソスールの
理論を適確にコメントすることは専門家にもむづかしい。そこで、ゆい
ゆいは、以下、丸山圭三郎氏の整理、及び、解説等をも参考にし、
ゆいゆいの関心に取り上げたいくつかの論点を要約してみよう。

ランク ソスールは、真に言語学が対象とすべきものは何か、を
探してもめついた、と言うことができないであろう。そのために彼が真
とした最初の区別が、有名な langue (言語) / parole (言—ある
いは、言行使、とでもいってよ) の区別である。ある社会の人々が弁な
つているあらゆる言語活動の全体 (langage) も、言語学は対象とす
るものではない、言語学が固有に扱うのは、langue である、とソス
ールは規定する。

langue がどのようなものであるか、=ここで考えるべきであるゆ
ゆいは、langue の概念が、デュルケム¹¹のいう、規範 (norme)、もしくは社
会的事実 (fait social) と親近性をもつ概念であることを、G. ルー
ンとともに確認している。ソスールは、デュルケムと直接の接触を
もたなかったが、1911 年にはソスールの講座の後継者、弟子の A. ヴ
は、自他ともに許すデュルケム派の学者であり、彼を通じて、ソスールは、

完全にデュルケム派の所縁に属していた、と推論される。とてか、
langue とは、無定形の言語現象の総体のなかの、111111 (社会学に
いう) 構造的部全体であり、社会的に形成された規則の体である。
この意味で、langue の概念は、parole の概念とは、決して、対立
あつたつたの实体をさす概念でも、また、相対関係にある概念でも
ない、と考へられる。それは、言語現象をとりとるひとつの仕方に対応
している。ある個人が、ある状況で、発話する行為は、ひとつの絶対的言語
であり、parole であるが、このゆくも、言語のあるべき形に関する観念を
(潜在的にせよ) 含んでいる。個別的な言行為も、そのおる規範
の発現であるのだ。ソスールが、言語学の対象を、このおる langue
に定めたことは、彼が、素朴な経験主義を、方法的に否定したことを
含意する、と考へよう。ソスールが、言語とは、社会的事実である、と繰
りかえし強調しているのは、このおる彼の見解に因る。

共時態 / 通時態 langue の概念を明らかにすることで、ソスール
は、実験音声学に対する批判的態度を明確にしめたと思うが、次に彼
の提示する synchronie (共時態) / diachronie (通時態) の概念的
区分は、歴史比較言語研究に対する批判的態度を明きらかにするもの、
と考へるのである(*)。ソスールは、言語を「同時性の軸」上で研究す
る場合、「継起性の軸」上で研究する場合、を互いに混同してはならな
い、と厳にいましめられている。言語は、たしかに、時間とともに変化あるもの
だが、上のふたつの言語研究法は、本来、ふたつの変った研究
対象を、研究者の前に措定するものなのである。前者、すなわち、共時
的言語研究の対象であるところの言語は、(ある時点における言語では
(*) ソスールのおかいいた状況は、理論社会学が、(実験)心理学、な
らぬに、史的唯物論に對し おかいいた状況と、相通するものである。

あるが) 時間を捨象した, 不動のもの. とした言語 (のモデル) があるのである。(ソシュールは, これを, 均衡[△]ともよんでいす。) この存在言語は, 理論研究にとっての 仮設構成体のようなものであり, 抽象である。しかし, このような 共時態 とした言語が, まず: 一般言語学の対象として等請けられていることと, ゆいゆいは理解しなくてはならない。言語は, 数多くの記号や排列の諸規則からなる 総体であるのだが, これらの存在は, このような共時的な全体の存在を支えているのである。これに対し, 後音, あるいは, 通時的言語学は, 時間のうちでの, 言語の変容を対象とする。

ソシュールの理論的な関心は, 当然, 言語が共時的な体系を有する点に集中している。このことにより, 理論言語学の対象は, 継時的な変化から, 切りはなされる。ソシュール以後の近代言語学は, このようにして, 19世紀に特徴的だと思われる, あの, 進化論的な時間構成 (***) から, 自由となることができた。

体系の概念 このようにして, ソシュールが抽象した言語 (langue) は, あらゆる国語の普遍的なモデルであり, 特殊な体系である, と記述されているのである。では, ソシュールは, 言語を, どのような体系である, と記述しているかであるのか。ゆいゆいは, 次に, これを考えよう。その場合, 鍵になる概念は, 恣意性 arbitraire, 価値 valeur, 対立 opposition, ... である。

まず, ソシュールは, 言語記号は, 恣意的である, との1つである。この意味は何であるか (決して, 日常的, 通俗的に理解してはならない)。
(**) 日本において, カリム兄弟の如き仕事をした人々に, 柳田国男 折口信夫らの, 日本民俗学派の人々がいる。彼らの時間構成は, 基本的に, この1つ 歴史・比較言語学の時間構成であると言えよう。

らない)。まず, 恣意性の低いものとして, (言語)記号とは別の, signal (信号)——この場合では, 指示作用が, 完全に自然界における連関に結びついていすもの, という。たとえば: 煙のイメーヂ → 火のイメーヂ。——, symbol (象徴)——この場合には, 指示作用が, 自然界における連関に依存しているもの, という。たとえば: 平のイメーヂ → 平和のイメーヂ。——の存在ものと対比させられていることに, 注目すべきだろう。あるいは, 恣意性とは, 自然界における連関に, 依存していないこと (あるいは, 非・自然的な連関に依拠していること), を意味するものである。したがって, 才2に, 恣意性とは, 決して 必然性一般に 対立する概念として考えられているのではなく, 自然的な必然性とだけ, 対立するものなのである。記号が 恣意的な存在である (自然必然的な存在でない), とは, 記号が, 社会的な存在である (自然的な存在ではない), 記号が, 規則的な存在である (自然法則的な存在ではない), ということと, 同義である。

ソシュールが, 記号は恣意的な存在である, と表明したことにより, 記号の体系である言語もまた, 恣意的な体系であることとなる。ソシュールの把握によるならば, 言語を支配する秩序は, 自然的秩序からは独立していすのであり, 記号が何であるかは, 言語の体系 système のためだけに決定されることになる。つまりとこそ, 記号の恣意性の概念によって, ソシュールは, 言語体系の自律性を主張したことになる。

では, 次に, ソシュールが, この記号 signe を, どのように概念化しているか, と考えよう。(記号とは, 指示作用をもつひとりの単位である。1. まず, 単語 (あるいは, 形態素) に相当する, と, さしあたり, 考えよう。) ソシュールによれば, ある記号とは, signifiant と signifié の結合, にほかならない (図1)。

signifiéは、記号、能記、記号表現、signifiéは、記号子、所記、記号内容、などと訳される(後のものほど、訳が悪い)が、本稿では、^{SA}と^{SE}と略記することにしよう。

この、SA、SEの結びつきを、素朴実在論的に理解し

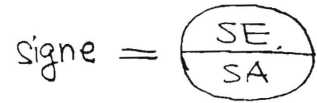


図1

である。日常的には、「ことば」というのは、ある事物の名称であって、思考をよびよる客観的に存在している。命名によつて、その事物は与えられるものである、と思ひこまれている。また、現代哲学の多くの論者、ことに、論理実証主義の立場に立つ人々や、反映論的な唯物論者たちは、究極的に、このような見解を支持している場合が多い。このような考え方は、Vシュールルの考え方とは明らかに食いちがってあり、また、現在の99%の言語学者の採るべきでもない。では、Vシュールルのいう、SA、SEとは、どのようなものか？

ゆえにゆえに、まず、Vシュールルが用意した状況の組み立てを理解することから、はじめる。スルーフフィールド風にいえば、これはあくまでも、メンタル・ステータスの態である。Vシュールルによれば、SAとは、ある

聴覚映像 image acoustique (「き」の音、物理音に「き」のイメージ)のことであり、SEは、ある概念 concept (木に「き」のイメージ、知識、体験...)のことであり(図2)。これらの

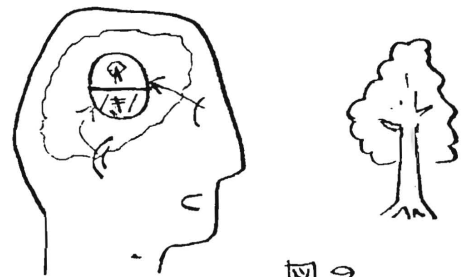


図2

結びつきは、観念的なもの同士の結びつきであり、さしあたり、実在する個々の「木」や、ki という音波 とは、関わりがない(*)。

さきほど問題にした、記号の恣意性とは、まずこの SA と SE との結びつきの恣意性である。「き」といふ呼ばれられているものを、「き」といふ呼ばれなければならないア priori な理由がないことは、明らかである。(以下では、無用の複雑さを回避するため、音声言語に際して、語をあらわすことにする。)

つぎに、ゆえにゆえに、ある記号が成立しているのは、いかにしてあるか、あるいは、ある記号の SA と SE とが結合するのは、いかにしてあるか、を問わなければならない。もちろん、日常的な感覚に即した言い方をすれば、「き」といふ呼ばれているものを、「き」といふ別「ことば」ができるのは、どうしてか、ということである。これは、二重の区別にもとづいている。まず、「き」といふ呼ばれているものは、「き」といふ呼ばれないものから、区別されている。そして、「き」といふ呼ばれ方は、「き」でないものから、区別されている。記号は、このように、SA、SE が同時にある仕方で分離されていることにおいて、成立しているのである。あるいは、ある記号は、別の記号から区別されていることにおいてのみ、成立している。いくつかの記号は、互いに区別された全体として存在しており、ひとつひとつの記号は、この全体から切りはなされることは、自立的なものであることができない。このような記号のあつまりを、Vシュールルは、価値の体系 système des valeurs (***) とか、対立の体系 système des oppositions とか、規定している。ここに注目しなければならないのは、Vシュールルの抱いている système の概念である。

(*) あくまで、言語の命名論的理解にこだわる人のために、その理解の最大の難点を、ひとつだけ指摘しておく。記号を、単に対象の名称であると考えることは、名称に先立ち、その対象が、ひとつの概念として成立していることを要請するが、これは、不可能な要請である。

ソシュールの記号観に於いて、記号（あるいは、通常にいふ、意味、といつてもよい）は、SAの差異を半掛りにして、体験を分節するとこに生ずるのである。このようにして生ずる記号のシステムを、凡山々にしたがって、図示してみよう（図3）。分節がなされる以前においては、音のイー干も、また、概念（心的内容）も、まったく連続である。音は、互いに互いに異っており、差異があるとしても、互いが、ことごとく対立させられる限り、別々のSAを形づくることはできない。しかるに、ある種の音の差異を対立させることにおいて、いくつかの音形を分節し、そのことにおいて、互いに対応する体験をも同時に分節する、ということが、（集合的に、社会的に、ひとつの文化として）生

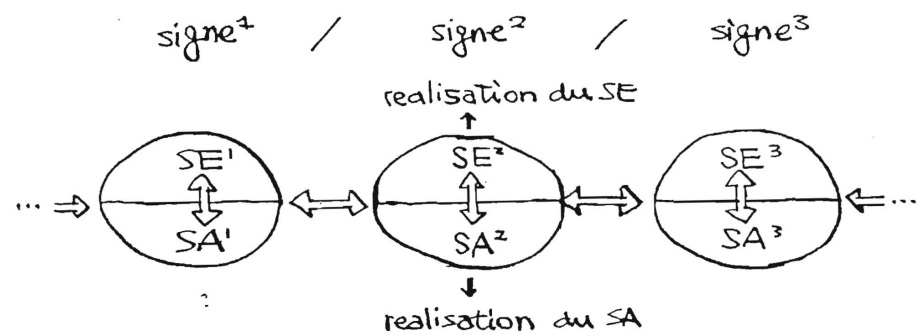


図3

(*) 二に於いて価値 *valeur linguistique* とは、物々々の通常の連想とはかなり離れた概念をさすので、注意を要する。『まき』という記号の価値とは、『ま』という記号が、記号の集合のなかで、『ま』以外の記号、たとえば、『くさ』、『いし』、... に対して占められている領域をさす。Ω - 『ま』、という。ある言語の中で、記号は互いにその価値を決定し合うのであり、その意味で、ひとつの *systeme* をなすのである。価値もどうであるが、共時態 / 同時態 という概念において、ソシュールは、経済学からの連想を有効に活用している、と思われる。

いる。ソシュールは、この認知的な分節を、一枚の紙をきいて表 (SE) も裏 (SA) も 11ちどきに切れしめること、にたとえている。このように成立する記号は、2重に認知的である。また、ある記号において SA、SE の結合 (↕) が認知的であること、として、互いに、また、記号相互の分節・対立 (↔) が認知的であること、として――。

ソシュールの描きだした *systeme* のモデルは、一種の相互連関システムであり、同時決定的なシステムである、と云ってよいだろう(*)。そこでは、個々の要素的な項 (*terme*) の存在は、自立的でなく、全体依存的、相互規定的であり、原子論的なモデル構成とは、ちよと反対の極にある。

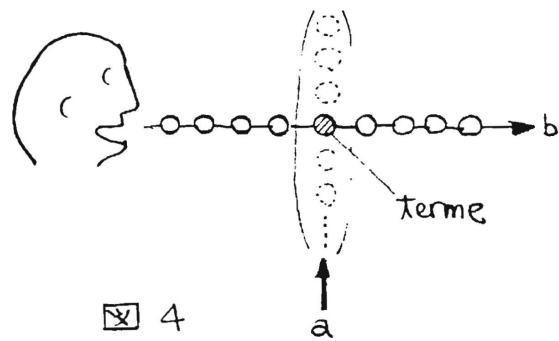
線的特質

ソシュールが、言語の特性としてあげているものに、SAの線的特質 *caractère linéaire du signifiant* がある。この特質は、要するに、言語が口をついて順に喋られる、という制約に由来するものである。この特質から、言語記号の排列に関して、次のふたつの場合を区別して考へるべきことが、みちみかされる。その区別とは、*paradigmatique* (並列的、もしくは、並列的) / *syntagmatique* (結合的)、の区別である。両者の関係を、図4のようになすことができるかもしれない。実際の発話が、bの示す方向を示される、とし

(*) ソシュールは、CLGのなかで、構造 *structure* の用語を用いている。もしくは、*systeme* と同義に用いている。しかし、ソシュールが描きだした、*systeme* の概念は、のちにあらわされるヤコブソン、レイ＝ストロムらの構造主義者に対し、『構造』概念の雛形を与えた、と今日言われている。

ソシュールに関する記述には、互明志氏のレポートに買うところが多い。記して謝す。

ある語(記号)に注目すれば、並列的とは、その記号のかわりにどこにおかいたかもしれない(その記号の価値を決定しているから)↓



a: paradigmatique
b: syntagmatique

図 4

↓他の一群の代替的な記号であり、この実際の記号(●)に対しては、潜在的、連合的 (associatif)である。これに対して、統合的とは、顕在的な、実際のの排列を不変。この二つの軸は、言語学の共通概念となった。aは、語彙、bは文法、にそれぞれ相当する。と考へてみるが、bの排列原理の研究は、フォスターのあらゆるまじり、あまり進展しなかった。である。

並列/統合は、時系列中における要素の排列を記述分析する場合に有効な、一般的概念である、と云ってよからう。

ソシュール以後 ソシュールの理論は、きつめと興行きのふかい、発露の見込みの高い学識ではあったが、彼の死によつて、その発展は中断され、混乱に満ちた遺稿だけが残された。しかし、そのうちの言語学界の動きは、全体として、ソシュールの理論的基礎を背景としながら、理論的開花をとりついでいた、といつても、言ひ過ぎではない。フランス学派は、まず、音韻論 (phonologie)において、大きな成果を生みだした。ソシュールの理論には、SA 相互の対立を根拠づける実体についての、つこんだ議論はなかつたのであるが、トルバツコイは、音素 (phoneme)の概念を明確に定式化したのである。

言語が、音韻体系を基礎とし、その排列の上に、組み立てられるものであること——マルチネ流に言へば、二重分節を有すること、——が、理論モデルの形で定着した。今日では、言語理論は、音素論ないし音韻論、形態論 morphology、統合論 syntax、意味論 semanticsの語彙野に大別されるのが、あつたであるが、このような理論構成も、ソシュールの射程のうちにあつた、といつても、かまはない。

構造音韻論は、言語の機能的理解と結びつたような形で、1930年代から、50年代にかけて、トルバツコイ、ヤコフソン、マルチネらの手により、急速に発展していった。ヤコフソンは、音素が、11つの弁別的可能性 distinctive featuresに分析できること、をいふ。あらゆる言語の音韻体系は、弁別的可能性の、12の二項対立 binary oppositionsの目録に還元されること、を主張した(*)。情報理論に先立つ着想さへ、それとともに発展したヤコフソン流の音韻論が、レヴィ=ストロースの構造人類学の着想に、決定的影響を及ぼした事実は、つとに有名である。マルチネは、共時的音韻論から、音韻の時代変化の法則性を再び扱う、連時的音韻論の展開を試みている。

記号学や認識論 (epistemologie)は、フランスを中心にして、近年独自の発展を示しているが、なお、全般的な展望をひらくに至つた理論は、存在しないように思ひやる。イェルムスレーの言語素論は、今日もなおの独創的価値を喪つては、ないといふ。

統合論は、フォスター以前においては、ゆかりが、こゝで注目するほどの仕事はなかつたようである。

(*) ヤコフソンのこの着想は、パーソンズのパターン変数の着想と酷似しているが、両者の関連を探ると、興味が、かゝりない。

意味分析の分野では、音韻論における構造分析と同様に、意味素を発見しようという試みがいくつか行なわれた。ことに、親族呼称法 (kinship terminology) を分析する試みは、ドイツ、ウォーナーをはじめとして、ラウンズバリ、ハメル、等々数多いが、レヴィ=ストロースも指摘する如く、その多くは、非常な方法論的難点をかかっている、と言っても過言でない。古くは、プロットに始まり、近來レヴィ=ストロースが神話学として発展させている方法は、上の如く語を意味素へ分解しようとするのとはちょうど逆に、文をひとつの意味素(神話素)とみたて、その構成する全体としての構造(筋 story)を考察の対象としようとする試みである。神話研究は、意味の新しい概念をもたらし、その他の社会現象を構造的に考察しようとする一連の試みを誘うきっかけとなった。

3. フレームフィールド：行動主義モデルの蹉跎

つぎに、本節において、ゆいゆいは、フロムスキー以前のアメリカ理論言語学の興味ある実例として、フレームフィールドの後期理論を少々検討してみたい。

レナード フレームフィールド (1887-1949) は、サピアと並んで、20世紀前半のアメリカ合衆国を代表する著名な言語学者である。フレームフィールドは、サピアと異って、あらゆる分野に多能な天才ぶりをお示しおたことにはななかったが、教科書を通じて多くの言語学者に影響を与え、ひとつの学派をなして一時期合衆国に君臨した。狭義に「構造言語学」とおぼしめすには、この派をすのかが、比喩である。

ゆいゆいは、フレームフィールドに注目するのは、彼が、言語学をひとつの自律的な科学とするための方法論的基礎づけを、最も相

たつ精神的におしすすめたからである——たゞ、その試みが成功したとは言えなかったにせよ。そこで、ゆいゆいは、アメリカ構造言語学の諸々の側面については一切考察せず、フレームフィールドの方法論とその諸帰結にのみ言及する。

『言語』 フレームフィールドは、教科書を2冊著している。1冊目は、『言語研究入門』(1914) といひ、言語記述の枠組みとしてヴァント心理学を採用することを明言するものであった。それに対して、彼の2冊目の教科書『言語』(1933) は、彼の180°の転回(と言つてもよければ、転向)を示している興味深い。フレームフィールドは、従来の自らの立場、すなわち、過去の多くの言語学を、メンタリストティックな立場として斥け、それに対するに、唯物論的立場、メカニスティックな立場を、自らの立場、あるいは言語学の立場と表明している。おなゆち、フレームフィールドは、ワトソン、および、ウェイスに倣ひ、心理学に並行して、自らもまた行動主義の方法をたどろうとした。言語学は、「科学」にならねばならず、その方法は、①厳密な行動主義、②メカニズム、③操作主義、④物理主義、の基準をみたしていなければならぬ、という。『言語』の厳密さは、同時代の言語学者の多くを従わせることとなり、いわゆる「後フレームフィールド学派」の出発点となった。

行動主義モデル フレームフィールドが描いている言語現象のモデルは、 $S \rightarrow R$ (刺激 → 反応) 理論の上になつた、行動主義的モデルである。ただし、言語活動は、ひとつの代用反応であり、代用刺激となるので、フレームフィールドのモデルは、定式 $S \rightarrow r \dots s \rightarrow R$ として要約できるのである。『言語』第2章にある有名な例によつて、フレームフィールドのモデルがきゆんとあるところを、理解してみよう。

「チャックとフィルが小道を歩いている。フィルは空腹である。フィルは木にリンゴがなっているのを見る。フィルは、喉頭・舌・歯唇を用いてものおと (noise) を発する。チャックは、柵をとびこえ、木におひのほり、リンゴをもち、フィルのところに歩くと、フィルの手でリンゴをわたす。フィルはリンゴをたべす。」 [Bloomfield, 1933: §2.2]
 これらのできごとの全体を、ブルームフィールドは、3つの部分に分かつ (図5)。

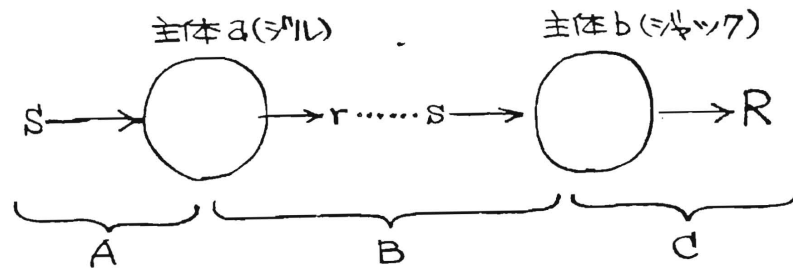


図5

これは、時間の順に、A: ことは「行為に先行する 諸々の 実際 のできごと (これを、話し手の判断、とよぶ)」、B: ことは「(Speech)」、C: ことは行為にひきつづく 諸々の 実際 のできごと (これを、聞き手の反応、とよぶ) のことである。上の例では、Aは、フィルの胃袋が収縮し胃液が分泌されていたこと、リンゴから反射した光波がフィルの眼球に射たこと、柵をよびこみ、Cは、チャックの一連の筋肉の運動等を含む。

ブルームフィールドは、言語現象も、 $S \rightarrow R$ 図式により把握される行動一般の、一特殊場合である、ととらえている。ことは「行為は、他の行動と異なるところはないが、ただ、「別な主体に反応(R)をなすしめる力がある」ために、ひとつの 代用反応なのである。人間におけることは、動物の場合にくらべて、いちぢるしく分化しており (113113の代用反応におよび113113のRをなすしめうる)、また、中絶的性質、抽象性、を備え、思考にも用いる (おなわち、自分に語る) ことができる、という特性から、他のできごとから区別して、ことは「行為」として概念化されるのだ、という。このような視角において、ブルームフィールドは、言語現

象を、一般的な行動の連関関係の (音声と媒介とした) 特殊な場合、おなわち、 $(S \rightarrow r) \times (s \rightarrow R) \rightarrow$ ことば: $S \rightarrow r \dots s \rightarrow R$ の意味である——として把握し、この枠組みにおいて記述していることと、おなわち、しるべきことができるであろう。

意味 この枠組みは、ことばの意味 meaning に関する彼の考え方にあらわれしている。ブルームフィールドが定義するところによらば、あることばの意味は、そのことばが結びつけられる 諸々の 重要なことばら、であり、先の図式でいうならば、Bの意味とは、A B C でおなわちいばならない。このような理解は、意味理解の一方の極——(素朴)行動主義的な理解の典型である、と云える。その特徴は、① 意味は、全く観察者においてだけ定義され、構成される概念であり、主体 (図5の a や b) の内的過程に関する言及を必要としないこと、② 言い換え、事実連関と、意味連関とが、区別されていること、である (※)。Bは 考えらるる ことは「行為の全体をあらわすのに好し、A, C は、それらに対応する あらゆる 実際 の出来事の全体、おなわち、生活世界的一切をなすことになる。

ブルームフィールドは、 $S \rightarrow R$ 図式を好置することにより、彼以前の「非科学的な」意味の概念を排斥しようとしたが、ちからとて、彼の意味の把握が成功しているとは、到底言いがたない。ブルームフィールドは、理想状態 (おなわち、観察者が、Bの全と、並びに、A-Cの全について、記述的なデータを有している、全知なる状態) においては、意味は、BとA-Cとの対応を記録することによって、完璧に知るこ

(※) ブルームフィールドの定義では、B (ことば) の意味は、それと先行する状況 (A) のことであるのか、それにつづく状況 (C) のことであるのか、あるいは、両者を一致するものなのか、等とついで、また (明らかでない)。

とができる。と表した^(*)。この場合、言語学は、音声学(phonetics)、意味論(semantic), のBにたつに命かいる。音声学は、生理学的な過程Bの諸特徴のみをしらべるものであり、意味論は、その諸特徴と、A、Cの特徴との関連を論ずるものである[Bloomfield, 1933, §5.1]。ブルームフィールドのS→R図式は、そのような意味論のイメージを描きだしはしたが、それは、彼自身に於て、ゆいゆいの(言語についてなく)世界に関する知識がきりぬき不完全であるという理由に於て、現下の言語学の課題から放逐されてしまう。このおりに、後ブルームフィールド学派は、意味に関する積極的、組織的な考察を展開しながら、その音韻論、形態論、統語論、等の諸分野を展開して行く。

しかしながら、実際には、ブルームフィールドの方法論の上にアノリ種言語学がまがかりたのではなく、むしろ、経験的な手法のつみ重ねの上に成り立っていた床が、ゆいゆいのみでおくはす肝腎な床である。ブルームフィールドの科学主義は、主要には、態度として受容されたのであって、そのS→R図式だけを方法論的基礎として言語研究を執行することは、そもそも不可能である。ブルームフィールドは、その理由を、意味連関の複雑性に因る、と考へたおであるが、ゆいゆいの、主体の内面に関するモデルを何ら設定することなく、これは「行為を記述しようとするS→R図式そのものの欠陥に因るのではなから、を検討してみた方がよいであろう」。

(*) この場合、主体aの状態sは、主体bの状態a関数 $f(s)$ として記述でき、主体bの状態Rは、主体bの状態a関数 $g(s, S) = g(f(s), S) = h(S)$ として記述できることになるであろう。このようにゆいゆいは、ことば $(r=s)$ の意味は、 $f^{-1}(r)$ 、 h 、 $h(f^{-1}(r))$ として、あらわすことができる。しかし、ワトソンの心理学の場合と異なり、刺激Sは無限に錯綜しており操作できないから、上の手順は不可能である。

ヒップがから2強弱した言語の文化的な重要性、フロムスキーの心理学的なモデルなどは、11かゆい、ブルームフィールドの図式に対する批判として考へることができるのである。そこで、ゆいゆいは、ブルームフィールドの音韻論を例にとり、ゆいゆい 彼自らのS→R図式と矛盾する関係にあることとみとおしたいと思う。

音韻論 ブルームフィールド自身もまたように、「音声学者は、どの特徴がコミュニケーションにとって有意義である。どの特徴がどうともゆいゆいについ、ゆいゆいに誘うことができるか」[Bloomfield, 1933, §5.2]ののである。おなゆい、音韻論は、彼のいう「意味」にも注意をむけたところの、「有意義」とは「音の研究」と定義される^(*)。しかしながら、前頁注^(*)にのたように、ブルームフィールドの $S \rightarrow r \dots s \rightarrow R$ 図式では実際、まじまじの意味のあかたを具体的に記述することはできないのであるから、音韻論の基礎づけとはならない。そこで、ブルームフィールドは、ひとつの大きな飛躍として、次のような仮定を措く。おなゆい、このことは「共同体におい、ゆいゆいの発話は、その形式ならびに意味に關し、似^(alike)である、という仮定である。

この仮定は、実際的な仮定ではあるが、ゆいゆいに、みつつのこことを考へさせるといえるであろう。まず、この仮定は、あることは「共同体の人々が、同一の刺激(S)→反応(R)特性を、(自然的に、文化的に、を問わず)事実として、共有している、ということと仮定している。そして次に、この仮定は、このS→Rの連鎖としてある言語現象が、実験のおに連

(*) ここでいう「有意義 (significant)」とは、何らかの意味を有することをいうのではなく、何らかの意味の差異を生じさせた点とらほどのことをさすものである。これはヨーロッパ構造音韻論のいう、「関与的 pertinent」の概念に、ほぼ相当する、といふ。

織なものはなく、分類された、^ト ^ト 観音的なものであることを、仮定し
 113、と1123。これらの仮定は、^ト ^ト 別々ながら、スルースールドの S→R
 図式にとりては、超越的な仮定である。と告げるであろう。しかし、スル
 ースールドは、そのおに分類された s...r の音素的単位——音素
 ——に関して、^ト ^ト 話し手が発音運動によって産みだし、聞き手が
^ト ^ト 之れにのみ反応するおに訓練された、示差的特徴の束である。と先の
 仮定のすぐあとで、のべている。これは、件の仮定——主体の行動特性に関
 する仮定が、通常には文化取なものであることを告げ
 るものにほかならない。すると、オ3に考えらることは、スルースールド
 の仮定にいう「意味」とは、S→R図式において定義された、観察者
 にとりての意味 であるのではなく、主体 a ならびに主体 b の内面
 に仮定された、仮説構成体としての意味(のシステム)であるともみら
 けなければならないだろう、ということである。すなわち、最初 S→R図
 式において あいほと排除しておいた 心的領域に関する仮定を、
 スルースールドの音韻論は、今度は自らの仮定として、採用せざる
 を之存かた、ということである。

このように考えらるならば、^ト ^ト 実際の言語研究において、ことは
 行為の主体の内面に関して、自然的な事象連関からは 相対的に独立
 したある種の仮定を措くことなしに、有効な分析を行うことが、果し
 てできるであろうか、という疑問が生じても当然であろう。音
 韻論は、記述言語学において、言語理論の基底をなす位置を占める
 のであるから、音韻論においてある仮定を設定することは、言語理論の
 全体に関して その仮定をおいたと同じことになる。

音素を発見するおの手續きとして、スルースールドが考えら
 113の ^ト ^ト は、いわゆる代置法である。この方法は、あることを構成する

113113の音響的特徴を少しづつ変化させて、ことばの同一性と区別とを
 判定させ、これらのデータを総合して 最小の示差的特徴の束を、音素と
 して見出たものである(*)。この手續きのセッティングを、図5に仿って、図示し
 てみよう(図6)。

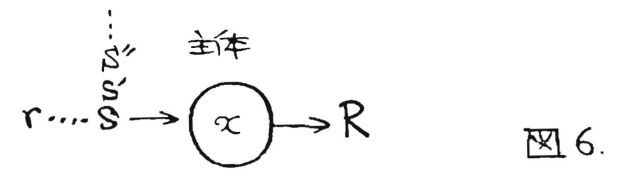


図6.

← ここから気が付かゆることは、まず、S→r...s→R 図式のかかりに、単
 なる S→R 図式が前提されていること。さらに、実証せしめらるるものは、
 主体の文化的な行動特性 α であること、である。主体の反応 R のおに
 おて区別せしめらるるのは、音響的特徴ではなく、示差的特徴である、とあ
 らかじめ前提せしめる。そのおにはしめ、示差的特徴 α 存在することが、
 確率的に実証せしめる。この循環は、主体におて 想定せしめた意味の存在
 を、観察に先立って 想定せしめなければならないことを あらわすものである。
 スルースールドの 方法論と、手續きとの間の 違いがいは、より一般
 的には、113つかの ^ト ^ト ——たとえば、形態の ^ト ^ト と音韻 ^ト ^ト
 の間の ^ト ^ト ありあき、すなわち、音素を定式化するのに、形態素を
 要請し、形態素は音素から定義する、という 踵着、としてあらわし
 てる。

帰結 ^ト ^ト しいわけは次のおに、スルースールド理論に
 ついて反省してみらる。おいかもしない。ともとも、素朴唯物論的な
 性急に「科学的」な分析方法は、言語現象の科学的理解に、
 なじまないの ^ト ^ト はなはか、と。というのは、モデル ^ト ^ト のおに、明確な意

(*) このやり方は、おに思われるが、同音異義語の存在をどう処理する
 か、などにつて、方法的に 難点がある。

味なれし主体の心的メカニズムに属する前提を含ませおかないと、言語現象を記述することは困難であり、かりに可能だとしおきまの複雑になりおす、と思わゆるのである。言語学と社会学とは、とくに意味を主題化する点においし 相同性を有しおるのであるから、理論言語学における行動主義モデルの隆盛は、ゆいゆいにひとつの教訓を遺すなれしと言えおいである(*)。

4. フォムスキー — 革命 : <生成> の理論

さしおに、ゆいゆいに扱っておきたいのは、アメリカ合衆国の理論言語学者、ハーバート フォムスキーの理論である。

フォムスキーの出現 フォムスキーは、1928年、フィラデルフィア生れのユダヤ系米人である。タマハライ語学者であったためか、ペンシルバニア大学では、言語学、哲学、数学を学んだ。彼の指導教官であったハリス教授は、後スルースキールド学派の最も尖鋭な理論家のひとりであった。フォムスキーは、彼を通じて、在来の伝統的な記述言語学の方法、成果、限界を知りつくしおく。そして、ハリス教授が試みおいた 文法的変形の開発にも参画し、やがて、それにおに限界を感じて新たな理論の開発をめざす。1951年から1955年における4年間、フォムスキーは、ハーバード大学で、クワイン教授の 数理論理学などを学ぶ傍、その作業に没頭(**)。スルースキールドの $S \rightarrow r \dots s \rightarrow R$ モデルに関連し、ひとつの着想をのぞくならば、次のおにも考おする。 $r \dots s$ は、社会システムにおける主体的な交換行為の過程であり、経済学の領合である。さしお(B) への意味は、論じおない。それにおし、その意味連関(A-C)を主題化する社会学が考おする。ゆいゆいに、ゆいゆいは "経済行動の人間学"、と解釈しおることがおきる。 —

した。やがて、その成果は、"Logical Structure of Linguistic Theory"としまとめられ、その一部 "Transformational Analysis" における学位をうけた。フォムスキーは、自らの理論の発表を志すが、国内の出版社ではおことからゆい、ゆいゆい 1950年、オランダのムトン社から、『総合構造』(邦訳題名、『文法の構造』)を出版する。この書物は、発表されるや、直ちに大きな反響をまきおこし、爾後、アメリカ合衆国のみならず、世界の言語学界の雰囲気は一変するに至った。

フォムスキーは、1955年以降、マサチューセツ工科大学(MIT)で、言語学を講じおる。1965年には、『総合構造』以後 発展させた多くの見解をまとめ、『総合理論の諸相』という書物にし、MITから出版しおる。ハル、ルーゴフ、フォード、カンツら、特色のある多くの学者が、フォムスキーと協同し、おるいはその理論を発展させるべく努め、このころには、フォムスキー以下の変形、生成文法学派は、学界の中心的勢力に急成長をたげた。同時に、各国言語の変形生成文法の開発が、日本を含む世界の国々の多くでおあめらゆいあり。"フォムスキー革命"は、目下も進行の真最中におる。

フォムスキー理論が、"革命"と評されるほどの爆発的な熱狂をもち、多くの言語学者におむかおされたという事実は、たしかにフォムスキーの理論が、独創的で有力な新理論であるから、という面によつても裏付けられおるが、それにお前に言語学を支配しおいた過激な行動主義が、言語の中心的な興味深い問題の多くを、言語学の枠外にお遺放しおしておいた、という事情を扱きたしおは、考おにふいである。フォムスキー理論は、たしかに革新的であるゆいゆいとも、それにお前の言語学における理論的伝統と裁ちきらゆいたところでお生まれたゆいゆいである。変形理論は、記述言語学の文法理論に

修正を加える試みとして生みだされたものであるし、また、チョムスキー自身もみとめているように、彼の音韻論は、ヤコブソンのものに近く、不差的特徴といった概念もほぼそのまみとめられている。チョムスキーの理論は、伝統的な音素の概念を解体するもののように言われるが、記述言語学の深い蓄積がなければ、彼の理論が開花しなかつたことも、またたしかであろう。

チョムスキーは、批判的知識人 というもうひとつの顔がある。彼は、バトナム戦争に対する理論的発言と実践行動とを一貫してとりつづけ、<新左翼>の人々のアイドルとなりとなった。こうした政治的発言の態度が、チョムスキー理論が前提とする人間把握、哲学、普遍主義等とどのように結びあっているのか、もまた興味ある問題である。

このように、目下流動しつつあるチョムスキー以後の言語学の現状を概観することはなかなかむづかしいことである。本節では、まったくの便宜から、1957年の『総論構造』だけを素材にして、チョムスキーの提案の理論的なポイントをかいつまんで理解することを試みよう。

言語理論の復権 フォルムスーパード的な記述言語学は、極端な経験主義に依拠するものであるが、データを記述するたのみに必要とされる以上の理論を築き立てる地盤はうしろめであった。チョムスキーは、これに対し、個々の文法を基礎づける一般理論を構想する。すなわち、この理論は、記述言語学の行き詰まりを突破するためには、言語行動を行う主体の「内面」に立ち上った議論を展開し、いくつかの仮説を提出するものにならなければならない。

また、チョムスキーは、言語理論と文法との関係を整理する。文法というものは、文をうみだす一種の装置であると、さしあたり考えられる。

すなわち、言語学に関する文法は言語学に関する一種の理論である、と考えられる。これに対し、言語理論とは言語学に関して適切な文法をみいだすものなのである。文法が、ひとつの××言語を叙述するといふのは、言語理論は、××××言語を叙述するわけではない、という関係にある。

チョムスキーは、言語理論のタイプとして、次に示すような三つの場合を掲げている(図7)。この議論は、チョムスキー理論がこれ以前の理論に対しどのような関係にあるかを示すものであり、また、他の社会科学の理論構成にも示唆するところ多いと思われるので、これを検討してみよう。

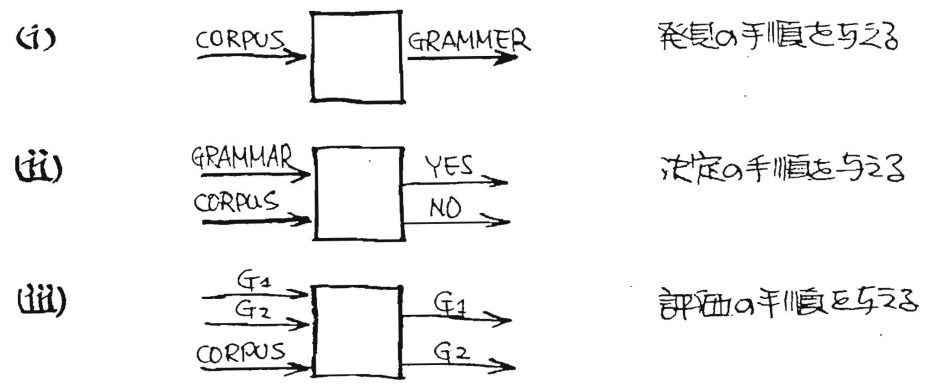


図7 [Chomsky, 1957, ch.6 (36)]

理論は、上のような手続を実行する操作であり、中央のボックスにふたをすいている。すなわち、チョムスキーの挙げているタイプは、ある言語の全資料(Corpus)を投入すると、そこから、その文法を推出するような装置としての理論である。この場合、言語理論は、文法を組み立てる機械的な文法、あるいは、発見の手順、を与えるものにならなければならない。チョムスキー以前の記述言語学は、このような理論たることを、自明の自権としてきた、とチョムスキーは考察する。タイプ2の理論のタイプは、ある文法と、全資料とが与えられた場合に、その文法が最良の文法であるかを

を判定するもの である。このような理論は、文法を産出することはないから、文法はこの理論の外で考察しなければならない。しかし、この理論は、最良の文法であるか否かを見わけるといふ意味で、決定の手順を与えるものである。そのタイプは、理論の外で見出された2つの文法 G_1, G_2 と、全資料とが与えられた場合には、 G_1, G_2 のうちどちらの文法の方が適当であるかをきめることのできる理論であって、文法の評価の手順を与えるものであるといわれる。

これらの手順は、前のものほど、理論に関わる強い条件とあらわれない。チョムスキーが、言語理論に求められているのは、その評価の手順であって、彼の言い方では、それ以上のことを言語理論に求めようとする従来の考え方は、何れも「不合理」であり「時期尚早」である、として斥けられる。したがって、当分の間、言語理論は(III)の評価の手順にとどまるべきであり、チョムスキーが『総合構造』において行っている作業もまた、情報理論の与える文法、記述言語学の与える文法、自らの変形文法、の3つの文法を、英語を例として、評価する作業にほかならないのである(*)。

文法の概念 については、わかりにくい。文法の評価の基準とは何かを考えてみよう。これには、文法の概念を理解し、さらにそのほか、文法取/非文法取といった概念を理解しておくことが、必要である。

チョムスキーの理論においては、文法的 (grammatical) という

(*) 社会学においては、理論の基準として、従来は素直に、その理論が経験的な妥当性をもつ、現実説明力をもつかどうか、だけが問われてきた。これに対し、評価の手順は、同じく妥当性をもつ複数の議論が存在した場合に、どちらを採用するかの基準を与えるものなのである。

概念が、文法の概念とは独立に、まず与えられている点に注意しなければならない。ある言語の全資料が与えられると同時に、そのうちのどれが文法的であり、どれが文法的でないか、という情報も与えられる。文法取/非文法取という概念は、1つ2つは、文法の外部基準をなすものである。ゆえに、文法は、次のように定義される——「 L の文法は、 L の文法的連鎖をすべて生成し、一方、非文法連鎖はなにひとつ生成しないところの、装置」であり [Chomsky, 1957: 13] (*), (**).

(*) ここで、連鎖(sequence)というのは、文とほぼ同じである。チョムスキーの定義によれば、言語とは、「有限の長さを持ち、かつ、有限な一連の要素から成り立つ文の(有限もしくは無限)集合」 [Chomsky, 1957: 13] であるのだが、この文は、有限な数のフォニム(phoneme)の有限な連鎖としてあらわされるのである。(チョムスキーの用いる "phoneme" は、構造音韻論がとるまでに用いた "phoneme (音素)" の用い方と異なることが多いから、注意を要する。)

(**) 「生成する(generate)」という概念と、「産出する(produce)」という概念と、を厳に区別しなくてはならない。産出とは、具体的な誰かが、特定の場面で発語を行なうに際して用いる用語である。これに対し、生成とは、具体的主体のかわりに、抽象的、一般的に、理想化した主体(ideal speaker-hearer)を想定した場合に、用いられることである。生成とは、文を産出する場合、文を解釈する場合、のいずれにか偏った概念ではない。生成/産出と並行する概念として、competence / performance のふたつの能力の概念がある。前者は、理想的な話し手=聞き手の有する言語能力のことをいい、言いまちがいは考へない。文法が説明すべきは、このような主体の能力である。後者は、具体的人間の能力である。

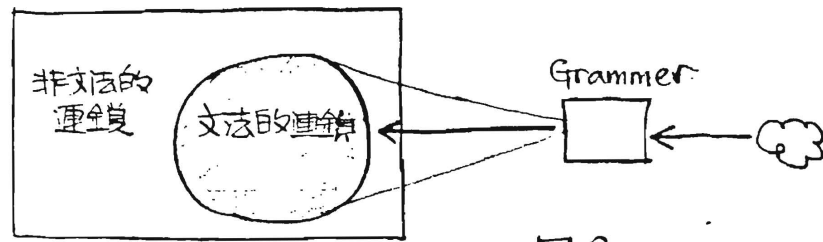


図8

この文法的 という概念が何を指すか、を明確に規定するか、は、実はあつかいにくい。というのは、それが、素朴経験的な概念ではなく、イデオロギカルな概念であるから、たゞ。チョムスキーは、それを、従来の三つの考えから区別し、混同を戒めている。まづオ1に、文法的とは、実際に生ずる発話資料とは区別される。発話はまちがっているかも知れないし、発話自体はかた文法的なものも多い。またオ2に、文法的であるとは、有意義、有意である、といった意味論的な概念から、独立である。オ3に、文法的であるとは、高位の統計的近似、という概念とも異なる。チョムスキーは、言語使用の創造的側面を強調するので、言語能力が生みだす文の数は無数である。オ2、文法的である2、資料の中に見出される確率が零の文が存在する。結局のところ、チョムスキーは、文法的文が、言語学外在的であると考えるところから出発して、文法的であることが、どのようなことであるか、を語るうとしていない(★★)。

(★★) 文法的である、という二が、聴き手の直観に合致する、ということとやや関連があることは、示唆されている。このことを拡張すると、文法的であることは、主体の内面にさしかる規範として考えることが、可能であるのかもしれない。しかしチョムスキーは、現に行なわれている秩序が、どのようして生産されたのか、に関しては、さう程興味をもっていないように思われる。ただし、チョムスキーの理論において、構成された文法が、文法的なものと呼ばれるべきか、を結果として記述することにはなっていない。

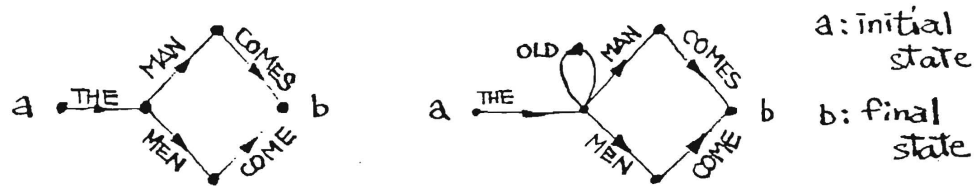
評価の年III身 チョムスキーの理論の新しさは、以上のおおな言語研究に関する方法論を前提として、変形・生成文法を創案し、従来の文法と比較することを通じて、変形・生成文法の方がより強力な理論であることを示している点にある。ゆいゆいは、より具体的に、いくつかの文法と比較する。チョムスキーの評価の判断に立会うことにより、チョムスキーの変形モデルの概略をながめておきたい。

いくつかの文法が、ある言語に対して提案されているような場合、それらを評価する基準を、言語理論は与えてくれるべきではない。それは、実際の基準として、どのようなものをチョムスキーは考えているのか？ それは、シンプル (simplicity)、ということである(★)。この基準は、機械的な手続きを与えるものではなく、理論家の判断に依存するものであると考えているので、後述、具体的に即して検討しよう。また、もうひとつ別に、より強力 (powerful) である、という評価の仕事も行なわれる。文法G1の生成する文のすべてを文法G2が生成し、しかも文法G2の生成する文の中に文法G1の生成できない文が存在するとき、文法G2は、文法G1より、強力である、といわれる。このような場合には、文法G1に替えて、文法G2を採用した方がよいことになる。シンプルの基準は、互いに相手より強力であるとは言えない、いくつかの文法の間で働く。

『総合理論』のなかで、チョムスキーが実際に吟味している3つの文法を、順次紹介していこう。はじめは、有限状態文法であり、次に、句構造文法、最後に、変形文法である。文法は、具体的に論じるべきではないので、チョムスキーと同じく英語を例に説明する(★) 文法は、いくつかのレベルからなるが、その全体として、シンプルであることを要する。チョムスキーも注意しているように、一部分をシンプルにすることは、他の部分がきわめて複雑と存在する場合にまじわさなければならない。

ることになる。

また次に、有限状態文法 (finite state grammar) とは何か？
この文法は、第2次大戦を契機に在来の言語学とは独立に発達した、情報理論 (高度の数学的状態遷移理論) の開発した文法である。この文法は、有限な規則を有限な語彙に対して適用して無限の文をつくることのできる文法のうちで、最も単純なものである (*)。有限状態文法においては、文法は一種の機械装置であり、これによって、文は始めから終りに向かって順次生成される。機械は、また、始点 という内部の状態にあり、以下、有限個の状態を次々経過するたびに、ひとつひとつの語がうみだされ、ついに終点に達して文が完了する、と表えられるのである。1例を図示し、図9のような状態図表をうる。



(i) [Chomsky, 1957:19, (7)] (ii) [Chomsky, 1957:19, (8)]

図9

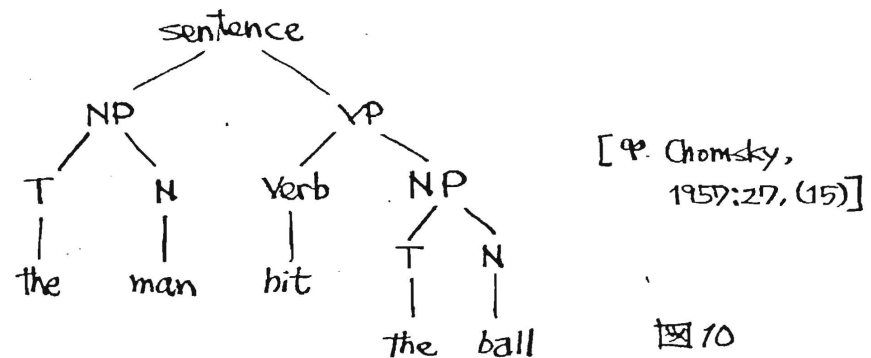
このようにして、言語を生成する機械は、「有限状態マルコフ過程 (finite state Markov processes)」と呼ばれる。しかし容易に予想されるように、この有限状態文法は、単純にあまの (少くとも) 英語を記述するには不十分である。たとえば、(i) ab, aabb, aaabbb, ..., (ii) aa, bb, abba, baab, aaaa, bbbb, aabbba, abbbba, ..., (iii) aa, bb, (*) 文法的な文の並びをリストに並べたものは、上述の条件を考慮しなければ、有限状態文法よりも簡単な文法であると言えるかもしれない (マーマン#3 15)。しかし、これは、資料を記述するものではなく、単にそのコピーにすぎず、またそのリストは無限になるから、文法の要件を満たさない。

abab, baba, aaaa, bbbb, aabaab, abbabb, ..., という連鎖を考えてみよう。これらの連鎖を、有限状態文法によって作り出すことはできない。しかし、英語には明らかに、少なくとも (i) や (ii) の形の連鎖を生み出す構文が存在していることが、たしかめられる。したがって、「英語は有限状態の言語ではない」 [Chomsky, 1957:21] ののである。

次に検討される文法は、句構造文法 (phrase structure grammar) とよばれる。この文法は、チョムスキー以前にあっては、記述言語学で一般的な文法であった (*)。句構造文法は、有限状態文法とちがって、端から順に文を生成していくことはせず、そのかわりに、一連の枝分かれ構造によって文を派生しゆく。一例として、次のような書きかえの規則を考えよう。

- (i) sentence \rightarrow NP + VP
- (ii) NP \rightarrow T + N
- (iii) VP \rightarrow Verb + NP
- (iv) T \rightarrow the
- (v) N \rightarrow man, ball, etc.
- (vi) Verb \rightarrow hit, took, etc. [Chomsky, 1957:26, (13)]

これらの規則を適宜適用すると、次の樹形図であらゆるおに、"the man hit the ball." という文を、終着連鎖として派生することができると。



[Chomsky, 1957:27, (15)]

図10

(*) フルムズールド派でいうところの、直接構成素分析の考え方は、この句構造分法の存にほかならぬ。

句構造文法は、より厳密には、はじめの連鎖の有限集合 Σ と、「 X を Y に書きかえよ」という $X \rightarrow Y$ の形の訓令公式の有限集合 F とおこなう文法、 $[\Sigma, F]$ の形に、定式化することが出来る。文法 $[\Sigma, F]$ によって生みだされる言語を、終着言語 (terminal language) という。チャムスキーは、次の定理を証明することに、成功した。

定理: 有限状態言語 (**) はある終着言語であるか? 終着言語のなかには有限状態言語でないものか? 存在する [Chomsky, 1957:30]。

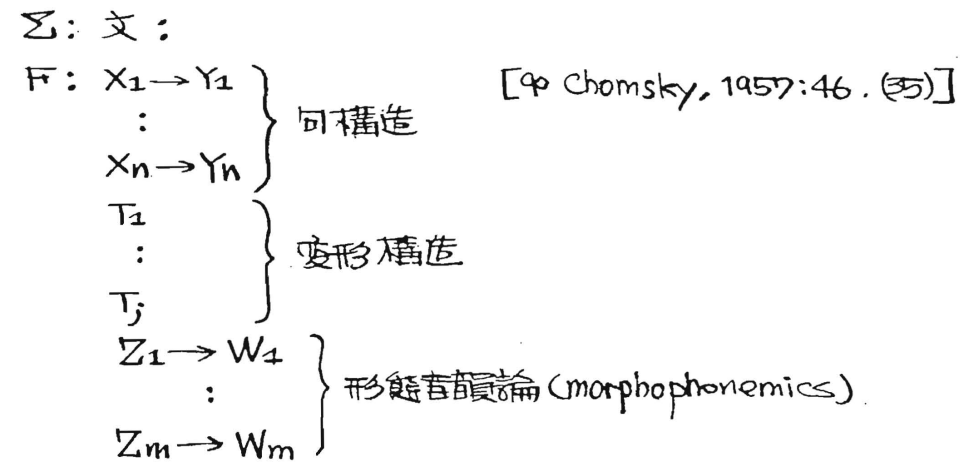
この定理は、句構造文法の方が、有限状態文法よりも、はるかに強力であることを示すものである。たとえば、39頁に示した、 $ab, aabb, aaabbb, \dots$ の連鎖は $[\Sigma: \Sigma, F: \Sigma \rightarrow ab, \Sigma \rightarrow a\Sigma b]$ とおくことにより派生することができる。

しかしながら、チャムスキーの最も注目すべき功績は、彼が独自に見つけたいくつかのルールは、英語の記述を非常に簡潔にすることが出来るにもかかわらず、どうしても、 $[\Sigma, F]$ 文法の中に組み入れることができないこと、を示した点にあった。とすれば、チャムスキーは、 $[\Sigma, F]$ 型の句構造文法をばなすなければならないことになる。

チャムスキーは、『総合構造』のなかで、接続の過程、助動詞の分析法、能動、受動の関係、など、いくつかの例をあげて、句構造文法が英語を必らずしも満足には記述しないことを主張している。それらを記述しようとするのは、文法 $[\Sigma, F]$ の枠内では、きわめて複雑なものである。それらの限界は、チャムスキーのみならず、こうした文法が言語を表象するにせよ、句構造をしか有してはならないことにもとづくのである。

次にわいわいのみるべき、^{変形文法} (transformational grammar) は、チャムスキーが、以上の句構造文法の言え方、^{変形規則}

則を付加してつくりあげたものである。変形文法は、全ての文を句構造によって生成させるかわりに、^{核文} (kernel sentence) — 単・平叙文・能動文 — の有限集合を生成する場合だけに限定し、他の文はそこから変形におこなうとする。正確には、句構造規則によって派生されるものは、^{基本} ^{語列} (basic strings) であり、ここに、義務的変形のみを施せば、核文からそれ以外の変形をも施せば、核文以外の文が、生成するのである。変形文法は、句構造規則、変形規則、形態音韻規則、の都合の部門からなり、次のような形をしている。



変形文法が、句構造文法にくらべて、どのように説明力のある文法であり、とすれば、簡潔な文法であるか、について知ろうとすれば、非常に細かいところまで多くの場合について行なわれる議論を、厳密に紹介しなければならないことになる。ここでは、その余裕もないし、また、そうしなければならない理由もない。またこうした議論は、個別言語によつて異なるものでもある。したがって、わいわいは、変形文法の詳細な論及を、ここでは割愛せざるを得ない。ただ、変形文法に拠るならば、構成上の同音異義形式 (structural homonymy) — 与えられた音素連鎖が、あるレベルで、2つ以上の方法に分析される事例 — を首尾よく説明できるようになる点を、強調しておくべきである。例

をあげて説明(2)しよう。有名な例であるが、

Flying planes can be dangerous.

という文は、たしかにあいまいであって、To fly planes can be dangerous., Planes which are flying can be dangerous. の両様の解釈が可能である。しかし、もとの文の直接命令分析は、

(((flying) (planes)) (((can) (be)) (dangerous)))

のひと通りしかなく、句構造文法の枠内でも別たつ場合を区別することができない。しかるに、変形文法では、別たつる異なる基底記号列、たとえば、plane + s + be + ing + fly と、someone + fly + plane + s とが、変形の結果、たまたま同一の派生記号列 flying planes となったものとして説明できるのである(*)。

『統合構造』のなかで、チョムスキーが行なった理論的な作業は、まず、ここまでにみてきた通りなことである。彼は、その他にも、英語において変形規則がうまく適用できる因を論じ、英語の句構造規則、変形規則も、ひとつの規則としてまとめあげてみている。8年後の『統合理論』の諸相においては、チョムスキーは、彼の理論を若干修正し、より綿密なものとした。すなわち、英語以外にも、世界の数多くの言語が、変形・生成文法にみえ記述できることあり、今日においても、この作業は鋭意、つづらぬところである。

言語理論と意味 さしこに、社会科学理論全般との関連で、チョムスキー理論と、意味との関わりも、少々のみでみることにしたいと思う。

(*) なせ、基底記号列が、実際の資料には決してみられない、+ でのつながった不思議な形にならなければならないか、は説明しなかった。しかし、この形を変形の対象として仮設しおいた方が、文法が簡潔に存るのである。

チョムスキーが多くの点でブルームフィールド的言語観を踏み破

つた理論を展開していると言えることは、ここまでにみた通りである。しかしながら、チョムスキーは、又これを、(どのように定義されたものであるにせよ)意味によつて基礎づけようとする試みに対し、きっぱりとした反対の意を表明している。チョムスキーは、言語理論の目標を、文法を詳細なことにたけおしているので、他の言語理論から、意味に関する積極的な考察を排除することにたつた(*)。この点は、ブルームフィールドの立場を、(しかも『統合構造』の段階では)基本的にうけついている、と言えるかもしれない。『統合理論』の諸相以後は、変形文法の考え方をさまざまに発展させようとする試みが繰り出し、いくつかの分派が形成された。チョムスキー自身は、「保守派」に属すると目されている。

変形・生成文法の言語理論を、哲学的な関心から、意味論と結びつける積極的な試みとして、カツラの仕事がある。カツラは、論理実証主義と日常言語派との背反関係を架橋し直すひとつの枠組みを立ち上げ、試みている [Katz, 1965/1970: x]。変形生成理論の立場にたつ意味研究は、「生成意味論」として独自の発展を遂げつつあり、今後注目しなげなければならない。

言語と意味とに関して、どのような理論構成を行つたか、は、主任のモデルも、どのように設定するか、にかかっていると見てよい。ブルームフィールドが $S \rightarrow r \dots s \rightarrow R$ 図式という、行動主義的モデルを考えたのに対し、チョムスキーが、「理想的な話(手) = 聴(手)」という、「メンタリスト」なモデル構成にたちもどつたことを、先にのべた。チョムスキーは、この理想

(*) 『統合理論』の諸相においては、変形文法の体系のなかで意味部門が追加される、という修正が行なわれたのである。しかし、変形文法が意味部門を最大の弱点としている点は、変わりない。

主本を、言語の生成装置としてモデル化し、数理言語学や情報理論の概念を用いて、その内部メカニズムを仮説的に構成しようとしたのである。彼の生成文法の考え、特にその書かれた規則 $X \rightarrow Y$ には、コンピュータ言語との明らかな類似性がみとけられ、心理学者 $\phi - \psi$ - ミウ - の試みしていた、有状態言語モデルの $P^0D - P$ を彼が批判したことも、情報理論に関する並々ならぬ関心をあらわすものである。さらに、フォウスキーは、機軸独立型の句構造文法の生成能力がオートマトン理論における ϕ - ψ - ϕ 収容装置の能力と同等である、等の興味ある証明を行なった。

しかしながら、フォウスキーのモデルにおいては、言語が、ある状態のなかで、伝達行為として実行されるという、側面が主題化されてきた。スルーストッドが考えていたような、経験的な意味連関は、言語理論の視野の外部に押しやられている。そして、言語が、解可可能である、という事実は、話し手と聞き手の関係として(社会的に)モデル化されるのではなく、話し手=聞き手の言語生成のメカニズム(能力)が、同型であり、普遍的である、という前提に解消されているように思われる。この観点も、極端にまでおしすすめれば、人間の言語現象を、ハードウェアレベルに説明するという立場(たとえば、「深層仮説」のおおの議論)とも、結びつきうるものである。フォウスキー理論のものが背景として有する意味観は、暗黙のうち、論理実証主義において顕著な意味観であると考えておいてもいい。

社会学は、意味が、集合的な、ひとつの社会的事実として、形成されるとする視角と論理とを有している(殊に ϕ - ψ - ϕ 学派、もしくは、社会人類学の構造学派がその代表)。この意味に關する科学的な研究は、従来の言語学の ϕ - ψ - ϕ の範囲内では、おこなわれていない。有用である種類の大きな進展を期待することは、残念ながら、出来

ずにはない。従って、社会学を学ぶ人々の中から、言語学に深い知識と関心を持ち、積極的な貢献をなす人が爾後陸續と輩出することは、期待してならぬのである。(了)

文 献

本稿で言及したものの及び、基本的と思われるものを、網羅的に掲げる。

Balthes, Roland 1957, Mythologique, Les editions du Seuil, 橋本秀夫訳, 『神話作用』, 1967, 現代思潮社。

Benveniste, Émile 1939, "Nature du signe linguistique", Acta Linguistica 1:49-55.

—— 1966, "Saussure après demi-siècle", in Problèmes de linguistique générale: 32-45, N.R.F.

Bloomfield, Leonard 1914, An Introduction to the Study of Language, N.Y.

—— 1933, Language, Henry Holt and Co., 三宅端・日野眞経訳, 『言語』, 1962, 大修館; 鳥康雄・増山節夫訳述, 『言語(上)・(下)』, 1959, 研究社。

Chomsky, Noam 1955, The Logical Structure of Linguistic Theory (mimeographed), MIT Library, Cambridge, Mass.

—— 1956, "Three Models for the description of Language" I.R.E. Transactions on Information Theory 19-2°, Proceedings of the symposium on information theory. Reprinted in R.D. Luce, R. Bush, and E. Galanter (eds), Readings in Mathematical Psychology, Vol. II, 1965, Wiley.

—— 1957, Syntactic Structures, Mouton, 鳥康雄訳, 『文法の構造』, 1963, 研究社。

—— 1959, "Review of Skinner, 1957", Language 35:26-58, Reprinted in J.A. Fodor and J.J. Katz (eds.), The Structure of Language: Readings in the Philosophy of Language, 1964, Prentice-Hall.

—— 1964, Current Issues in Linguistic Theory, Mouton.

1965. Aspects of the Theory of Syntax, MIT Press.
安井 稔 訳, 『文法理論の諸相』, 1970, 研究社。

1966. Cartesian Linguistics: A Chapter in the History of Rationalist Thought, Harper & Row, 川本茂雄訳, 『カールト派言語学: 合理主義思想の歴史の一章』, 1970, TEC。

1968, Language and Mind, Harcourt Brace Jovanovich; 1972, Enlarged edition.

1969. American Power and the New Mandarins, Penguin Books.

De Mauro, Trio 1972, "Notes bibliographique et critique sur F. de Saussure", in F. de Saussure, Cours de linguistique générale; 319-389, Payot.

Derrida, Jacques 1967, De la grammatologie, Les éditions de Minuit, 冠九和浩訳, 『根元原の流に—グロマトロジー—』(上)(下)の, 1972, 現代思潮社。

Durkheim, Émile et Marcel Mauss, 1903, "De quelques formes primitives de classification: contribution à l'étude des représentations collectives", L'Année sociologique 6 (1901-1902): —, 山内崑美夫訳, 『人類と論理—分類の原初的形態—』, 1969, セリカ書房。

Foucault, Michel 1966. Les mots et les choses: une archéologie des sciences humaines, Éditions Gallimard, 津和野 一・佐々木明訳, 『言葉と物—人文科学の考古学—』, 1974, 新潮社。

1969, "Introduction à la Grammaire générale et raisonnée", Republication Paulet, 井村 順一訳, 『ルイ・ボロウ・ド・グラームの文法』序文上, 1971, 『ロイヤル』11: 175-192.

Goodenough, Ward H. 1956, "Componential Analysis and the Study of Meaning", Language 32: 185-216.

橋爪大三郎, 1971, 「演劇的類型学」, 『地下鉄』4: 485-465。

Hekker, Johann Gottfried 1770, Abhandlung über den Ursprung der Sprache, 大阪ドイツ近世文学研究会 訳, 『言語起源論』, 1972, 法政大学出版局。

Hjelmslev, Louis 1943, Omkring sprogteoriens grundlæggelse, Ejnar Munksgaard; tr. by F. J. Whitfield, Prolegomena to a Theory of Language, Indiana University publications in anthropology and linguistics, (Memoir 7 of the

International Journal of American Linguistics, Supplement to Vol. 19 No. 1, 1953), 林 栄一 訳, 『言語理論序説』1959, 研究社。

池上 嘉彦, 1975, 『意味論』, 大修館。

Jakobson, Roman, 1973 (川本茂雄編) Essais de linguistique générale, 川本茂雄 監訳, 田村他訳, 『一般言語学』, みつろ書房。

恒電洋行 1975a 「ヴェーバーと意味の社会学」, 『現代思想』3-2: 158-166.

1975b, 「フレイションとLZの社会学」, 『UP』36: 9-13。

Lepschy, Giulio 1970 A Survey of Structural Linguistics, Faber & Faber, 菅田茂田訳, 『構造主義の言語学』, 1975, 大修館。

Leroi-Gourhan, André 1964-1965, Le geste et la parole, Vol. I, II. Editions Albin Michel, 荒木亨訳, 『身動と言語』, 1973, 新潮社。

Lévi-Strauss, Claude, 1945, "L'analyse structurale en linguistique et en anthropologie", Word (Journal of the Linguistic Circle of New York) 1-2: 1-12. 佐々木明訳, 『言語学と人類学における構造分析』, 『構造人類学』: 37-61, 1972, みつろ書房。

Loundsbury, Floyd G. 1964, "The Structural Analysis of Kinship Semantics" in H. G. Lunt (ed), Proceedings of the 9th International Congress of Linguists: 1073-1092, Mouton, Lyons, John 1970, Chomsky Fontana/Collins, 長谷川 伸也訳

『チャムスキー』, 1972, 新潮社。

(ed.) 1970, New Horizons in Linguistics, Penguin Books, 田中善美監訳, 『現代の言語学』(上)(下)の, 1974, 大修館。

Martinet, André 1970 Éléments de linguistique générale, Librairie Armand Colin, 三宅 隆嘉 訳, 『一般言語学要理』, 1972, 岩波書店。

丸山 圭三郎, 1971, 「ソシュールにおける体系の概念と二つの〈構造〉」, 『理想』456: 26-43。

三浦 つとむ, 1967, 『認識と言語の理論』(オ一部)(オ二部)の, 碩草書房。

1971, 『日本語は どういう言語か』(改訂版), 香野社。

1972, 『認識と言語の理論』(オ三部)の, 碩草書房。

- 1975. 「言語学と記号学」, 『試行』44:88-105。
- Morgan, Lewis H. 1877, Ancient Society or Researches in the Line of Human Progress from Savagery, through Barbarism to Civilization, 荒畑寒村訳, 『古代社会』(上・下)の, 1954. 角川書店。
- Mounin, Georges, 1968, Saussure, ou le structuralisme sans le savoir. Éditions Seghers, 福井秀男・伊藤見・丸山圭三郎訳 『ソシュール: 構造主義の原点』, 1970, 大修館。
- 1970, Introduction à la sémiologie, 福井秀男・伊藤見・丸山圭三郎訳 『記号学入門 — 二と五と七と三 —』, 1973. 大修館。
- 大久保よりや 1970, 「表現として存在しな表現 — 言語表現の原理的矛盾 —」, 『地下演劇』2:166-167。
- 1970-1972, 「日常語における精神学動機の意味性とその組織化 — 現代日本語体の生成化のために —」, 『芸術・国家論集』3:36-55; 4:32-51。
- 1971. 『言語学批判と生成主義 — 言語生成学序説 —』, 永井出版企画。
- 太田 朗・榎田 優 1974 『文法論Ⅱ』(英語学大系4), 大修館。
- Prieto, Luis J. 1972 Message et signaux, P.U.F. 丸山圭三郎訳, 『記号学とは何か — ミッサーマと信号 —』, 1974. 白水社。
- Протоп (Propp), Владимир, Я. 1928, МОРФОЛОГИЯ СКАЗКИ 大木伸一訳, 『民話の形態学』, 1972, 白泉書房。
- Quine, Willard von O. 1950, Methods of Logic; 1959. Rev. ed. 中村喜吉・大森杜蔵訳 『論理学の方法』, 1961, 岩波書店。
- Rousseau, Jean-Jacques 1781, Essai sur l'origine des langues ou il est parlé de la mélodie et de l'imitation musicale, 小林善彦訳 『言語起源論』, 1970, 現代思潮社。
- Saussure, Ferdinand de 1916, Cours de linguistique générale, 小川英夫訳, 『一般言語学講義』, 1972, 岩波書店。
- 1957. "Cours de linguistique générale (1908-1909), Introduction", Cahiers de Ferdinand de Saussure 15:

- 3-103. 山内素美夫訳, 『言語学序説』, 1971, 碩學書房。
- Skinner, Burrhus F. 1957. Verbal Behavior, Appleton-Century-Crofts.
- 時枝誠記, 1941. 『國語學原論』, 岩波書店。
- Wittgenstein, Ludwig 1921, Tractatus Logico-philosophicus, R.K.P. 坂井秀彦訳, 『論理哲学論考』, 1968, 法政大学出版局。
- 矢野武真 1975 『「吃音」の本質』, 弓立社。
- 百本 隆明 1965, 『言語にとりて美とはなにか』(Ⅰ・Ⅱ)の, 碩學書房。
- 1971a. 「言葉の根源について」, 『海』3-1:96-101。
- 1971b. 「詩的喩の起源について」, 『現代詩手冊』14-7:80-86。
- 1971c. 『心的現象論序説』 北洋社。
- 1975 『書物の解読学』 中央公論社。

— 〇〇 —